

△砧▽の時間（秋・三年）

田口和夫

△砧▽の前場、砧の段が終つて、ワキが帰郷せぬ事の告知からシテの死に至る「時間」

については、さまざまの解釈がある。現行各流の詞章のように、ツレ夕霧が、「いかに申し候、都より人の参りて候が、この年の暮にも御下りあるまじきにて候」（観世流）と云う

ならば、次のシテの嘆き「せめては年の暮をこそ、偽りながら待ちつるに」ときつちりと対応して問題はないのだが、岩波古典大系の底本のような室町時代末の古写台本によるとそういう対応が成り立たないのである。室町末期筆長頼本・下間少進旧蔵車屋本なども同じだが、それらの本では、夕霧は「いかに申し候、殿はこの秋もおん下りあるまじきにて候」とだけシテに伝えるのである。夕霧がワキに命じられたのは「この年の暮には必ず下る」ことを伝える事だった。命じられた事と異なる表現で伝えたことになる。矛盾のようだが、これが古型なのである。現行詞章は、これを合理化するために△砧▽の再興上演後

に工夫されたものである。

岩波古典大系の頭注は「砧で心を慰めて日を過ごすうちに、別の便りが都から届いたのである」とし、明暦の野田本（これも古型のツレの詞）による古典文学全集の解説も「砧を打ち終わった後、しばらく『時間』があつて、殿の帰らぬという知らせがあつたと解すべきであろう」と注している。

現行詞章に至るまでも、様々の工夫がなされており、例えば、ワキが秋は下れないが暮には下ると伝える事を命じ、ツレがシテと対面した時にそれを伝える問答が付加され、次の使者がその年の暮に帰る事をも否定するという本文（豊島作右衛門手沢本・伝松平伊豆守旧蔵本など）も見られる。こういう改訂は大系・全集における解釈の方向と一致し、現行詞章につながるものだが、古写台本を虚心に読んだとき、本当に砧の段の後に時間が経過したといえるのだろうか。

砧の段の季はいうまでもなく秋である。夫

婦の仲の「飽き」を響かせながら、秋の景物が繰返し詞章を彩っている。連歌の寄合集である『連珠合璧集』に、「衣打トアラバ」として「夜寒・鷹・月・霜」など、「秋の末の心」として「やゝさむし△秋さむし 夜さむし・枯野の露・虫の音かるゝきぬた衣打」などの、同季の寄合語を挙げているが、これらが集中的に用いられているのである。

それと同時に、砧の段が過ぎ、シテの死を描写する上ゲ哥の部分にも「枯野の虫の音」とある事に注目したい。これも秋の寄合語である。ツレ夕霧の「この秋もおん下りあるまじき」という言葉を間に置いて、その後も後も季節は秋なのである。近世以降の改訂を無視して古型に比べ、時間は連続し、しかも別の使が都から下ることはなかったと考えられよう。

△砧▽の構想の主軸に、中国の蘇武譚による砧があることはいうまでもないのだが、もう一つ、「三年」という時間が一曲を貫いている事に注目したい。蘇武譚はその原典の段階から三年という短い間の出来事ではない。ところが△砧▽では、冒頭のワキ名乗りにおいて「当年三年になり候」と述べ、シテとツレの問答で「三年まで」、上ゲ哥で「三年の秋の夢」という。そして後段でワキが「三年過ぎぬることを恨み」妻が死んだという。

夫と別れて三年過ぎたことから死んでゆく妻の姿は、いうまでもなく『伊勢物語』二十四段の「あらたまの年の三年を待ちわびて、ただ今宵こそ新枕すれ」と歌った妻を想起させる。夫は三年間音信がない。妻は他の男と結ばれることになり、その婚姻の日にあたって夫が帰ってくる。事情を知った夫は去ろうとする。妻は引きとめようとしてもかなわず、夫のあとを追い、「あひ思はで離れぬる人とどめかね、わが身は今ぞ消えはてぬめる」と歌って、そのまま死んだのであった。『伊勢物語』の古注は、この突然の死の悲劇が信じられないうらしく、本当に死んだのではなかったのだと解説し、『伊勢物語愚見抄』でも、「此思ひよりやまひとなりて、つるにうせたりといはんとて、甚しくはかきたる成べし」と云っている。

さて△砧▽において、冒頭に夫が三年の年の暮を気にしているのは、『伊勢』のこの話と同じく、三年が満ちる時だったからであろう。シテとツレの問答で、シテが「人こそ変はり果て給ふとも……などや音づれなかりけるぞ」といい、夕霧が「おん宮づかひの隙もなく、心よりほかに三年まで」といつている所から考えると、この夫は妻に三年の間『伊勢』と同じく音信しなかったものと考えられる。三年が満ちようとした時に訪れた便

りは、期待と違う、夫が下らぬことの報知であった。△砧▽の妻も『伊勢』の妻のように突然絶望の淵に陥って死ぬのである。「病の床に伏し沈」んだとしても、『愚見抄』程度で、それほどながい病氣ではなかったであろう。

夫は予定通り三年目の年の暮に帰って来たと考えてよいだろう。妻を悲劇の死に追いやったのは従って、夕霧の「この秋もおん下りあるまじき」という言葉であった。これはその限りではワキの命令に背いてはいない。年の暮に必ず下るということは、秋には下れぬという実態を含むからである。しかしこれを聞いた妻は、秋に下らぬこと即ち年の暮にも下らぬと解し、絶望したのである。おそらくワキの愛妾であった夕霧の、これはささやかな作爲であったと考えたい。重要とも思われないその一言が、どれほど重大な結果をもたらすか、それは夕霧自身にも測れなかったのであろう。しかし、作者世阿弥には、砧の世界に『伊勢物語』の時間を重ねあわせた時から分っていた悲劇だったのである。

— 八八・一〇・二六 岩槻にて —

(文科大学教授)